「幼きイエズス修道会」京都支部における看護婦養成事業について（明治二五―三七年）

坂本玄子
高橋政子
名原寿子
広瀬房子
山根信子

「幼きイエズス修道会」は、一八五九（安政・六）年フランスのショファイユに於て、メール・アンティエ（Mère Antie 1801―83）という教育修道女によって創立された。教育と福祉事業への従事を中心としたカトリック修道女会の一つである。

日本には一八七七（明・一〇）年プチジャン司教（1829―84）の招きによって、四人のフランス人シスターが、ショファイユの母修院から派遣されたことによって仕事が始まった。

明治一〇年神戸、一二年大阪、一三年長崎、一九年には岡山と京都に拠点をつくり、前年の一八年には長崎に本部（日本管区）が創立された（現在本部は宝塚市仁川で全国に二四支部、三〇〇余名の会員あり）。

この京都支部の修道女会が、明治二五年から日露戦争までの間にその孤児収容施設（センタンファンス＝Saint enfants）から成長した優秀な子女を五〇人余り、組織的に京都の一流公私立病院に送りこんで看護婦の訓練をしていたことが、当時のフランス人シスターの本国向け報告書によって確認されたので、その概略について報告する。

「幼きイエズス修道会」京都支部は、一八八六（明・一〇）年一〇月、シスター・セン・メリー院長と二人のナース・シスター（ドラクロワ、スタニスラス）と井上菊枝（聖名アガタ）という日本娘四人の着任によって、中京区六角通烏丸西入ルの小さな一軒の民家を借入れて発足した（現在中京区河原町三条上ル）。他の先進地と同様、センタンファンスの仕事から始め、傍ら京都の上流婦人を対象に、フランス

語や手芸の塾を開いて地域にとけこもうと努力した。

初代日本管区長・シスター・ジュスティン（1897—1901）は、一八八八（明・二一）年フランス母修院に帰り、翌年三名のシスター（第六次来日組）を同伴して帰日した。この中の一人、ザベリン（Xaverine 1868—1904）は当時まだ二一歳の若さであったが、京都センタンファンスの専属となり、子どもたちの世話を非常によくみた。そして子どもたちの集団生活の中にあって、弟妹たちの世話をすることをしつけられながら成長した年長組の娘たちを見ていて、この娘たちに看護婦の技術を身につけさせたいと希うようになった。

たまたまこの頃（明治二五年前後）かっての京都府顧問・山本覚馬の晩年の娘・山本久栄が、フランス手芸塾に顔を見せるようになっていて、ザベリンの発案に父と共に協力し、京都の一流医者との間に仲介の労をとった。

最初ビリオン神父（1843—1932）と交流のあった、上京に開業中の山田文友医師のもとに四人の娘を試験的に送りこんだところ、予期以上の好成績をおさめ、これを知った東山医院の半井澄院長からも六人の申込みをうけ、さらに京都府立病院・猪子止戈之助医師からも一〇人を希望された。そこで京都のセンタンファンスだけでは受けきれないので、神戸、大阪、岡山、長崎のセンタンファンスからも素質のよい娘を選び、前記三つの公私立病院に二三名の見習看護婦を委託した。特に公立病院に対しては娘たちを庇護監督する目的で、神戸支部から年配の婦人（天野）を専属に招いたけれど、これは病院側から歓迎されず、娘たちの生活全般にも院長が責任を以て配属するからと、修道院の手配は中止された。

京都に看護婦規則が発令されたのは、これから約一〇年後（明・三六）のことで、それも対象は派出看護婦であり、院内看護婦の資格は問われない時代であったから、こうした試みがされるまでは院内看護婦はすべて未訓練者で雑役婦に近いものであった。同志社病院は例外であったが、京都看病婦学校の卒業生は母校の病院以外でスタッフナースとして働らく者はいなかった。日清戦争を控えた一八九三（明・二六）年、日赤社京都支部が初めて短期（一〇ヶ月）の委託養成に着手したくらいで、京都帝大付属医院看護婦見習講習科（一年）の誕生も数年後の一八九九（明・三二）年

である。

京都医会では日清戦争後、自然発生的に増加する派出看護婦に対して府へ調査を依頼したり、看護婦と看護婦会に対して七項目の注意を要請している。因みに一八九五（明・二八）年京都市内には玉石混交六つの養成所があり、一三四人の卒業生と八一人の在籍学生が報告されている。

センタンファンスから見習看護婦に選抜され、医院で委託訓練をうけた女子は一〇年余の間に五〇人をこえたというが、この中から一五人がさらに日赤の養成訓練をうけ、日露戦争には日赤看護婦として応召し、また篤志看護婦として従軍したものが二三人いる。ザベリンは一九〇四（明・三七）年八月心臓病で歿しているからこの事業はその後発展することなく消滅したと考えられるが、センタンファンス出身の看護婦の何人かは目立たない存在ではあったが、派出看護婦やカトリック施設のナースとして一生をその道に捧げている。

近代看護発祥の地として、プロテスタント同志社病院に代表される京都の地にあって、カトリックの側にもこうした地味な看護婦養成への試みがあったことを併せて多くの人に知ってもらいたいと思う。

（看護史研究会）

「文献」

(1) 幼きイエズス修道会京都支部創立記及びその他の報告書（本部資料室蔵）

(2) 京都における派出看護婦＝橋本やよい（日看協調査研究第4巻）

(3) ビリオン神父＝池田敏雄（中央出版社）

(4) 幼きイエズス修道会と看護活動＝高橋政子（看護教育一九八一年六月号）